

弘前藩「御告御用」の基礎的考察

瀧 本 壽 史

はじめに

弘前藩では「御告御用」と称される行為が、正徳年間以降、特に享和年間以降連綿と行われている。しかし、この「御告御用」がどのような内容のものか、また藩政上どのような位置付けがなされていたのかについては、弘前藩藩庁日記（弘前市立図書館蔵、以下『国日記』）に四百回以上も記述がなされているにもかかわらず、これまで紹介も分析も行われてこなかった。

依拠すべき史料が『国日記』のみで、具体的にその行為を実証する史料の紹介がなされなかったためであるが、平成三年十一月、高照神社文化財維持保存会後援会から『高照神社所蔵品目録』が刊行され、同時に「御告御用」に用いられた「御告書付」と題される文書群が整理されたことから、その内容分析が可能となった。

本稿では右の状況を踏まえ、まず史料紹介を兼ねながら、二五三件のほのこの「御告書付」の史料学的分析を行い、次に『国日記』に見られる「御告御用」についての記載内容に検討を加えることで、この「御告御用」の全体像に迫り、最後に藩政上どのように位置付けられるのか

を、当時の藩の動向から見通してみることとしたい。すなわち「御告御用」の基礎的研究とするとともに、「御告御用」の開始・継続の意義を探ることができればと考えている。

最初に、高照神社とその所蔵資料について概観しておきたい。中津軽郡岩木町所在の高照神社は、春日四神とともに弘前藩四代藩主津軽信政を祀り、弘前藩において岩木山神社とともに厚く信仰された神社である。信政は唯一神道の奥義を極め「高照霊社」の神号を授けられた人物でもあり、生前から葬地として決めていた高岡の地に神式によって埋葬された。同地が選ばれたのは藤原氏の氏神を祀る小社があったとされるためで、津軽氏が藤原姓を名乗ったことによる。信政が没した宝永七年の翌正徳元年から二年にかけて、この高岡に五代信寿が建立したのが「高照霊社」である。社名は信政に授けられた神号に因んだものであるが、一般にはその地名をとって「高岡様」として尊崇されていた。弘前藩では社領として三百石を与えて神官としての役目を果たす祭司役を置き、藩が維持する神社としての体制をとっている。「高照神社」と言われるようになるのは明治初年の神仏分離令以降のことであるとされている。その後、明治六年には郷社、同一〇年には藩祖為信も合祀され、同一三年

には県社となっている。¹⁾

ところで、『高照神社所蔵品目録』によれば、総資料数は一、六〇二件²⁾、六七七点³⁾にのぼるが、その内容は次の五つに大別される。一つ目は真守銘の太刀（国重文）などの信政の遺品群。二つ目は五代信寿を初めとして歴代藩主や重臣らが奉納した大絵馬。三つ目は藩祖為信を合祀した際に旧士族たちが奉納した武具を中心とした一群。現在同社に所蔵されている古美術資料の大半はこの時のものである。四つ目は同社の祭札の記録や祭司役の御用留、さらには神領・神田などにかかわる古文書・絵図の一群。一八世紀初頭から第二次世界大戦までの同社の動向を知ることができる。五つ目は信政によって召し抱えられた山鹿流兵学者である貴田孫太夫の子孫の貴田稲城から明治三二年に奉納された大量の国絵図・城絵図類である。

一つ目の信政の遺品群はこれまでによく知られ、また諸書に紹介されてきたものであるが、二つ目の大絵馬は昭和六二年度の、三つ目から五つ目までが平成元年度及び二年度の高照神社文化財維持保存会後援会・岩木町教育委員会と青森県立郷土館等の調査によってその全容が明らかになったものである。『高照神社所蔵品目録』はその成果の一端でもある。本稿が分析対象とする「御告書付」は、この内四つ目の古文書群の中に整理される。

※引用史料および表については繁雑さを避けるため、本文末に一括して掲げた。

一 「御告書付」の内容

(一) 内容分類

「御告書付」は、藩が使者をもって高照神社に報告した内容を記した一紙文書群であり、享和元年から大正八年まで、二五三件二五七通⁴⁾が同社に所蔵されている。年号の記されていないものもあるが、記事内容から年代比定が可能なものも多い。

さて、この「御告書付」の内容は、史料2に見えるように、大きく

(ア) 天皇家 (イ) 将軍家・幕府御触 (ウ) 巡検使 (エ) 高照神社 (オ) 藩主家 (カ) 江戸・京都・藩内重要事項、の六つに分類されている。

表1は、「御告書付」二五三件全てについて、その実施年月日・勤仕者・御告内容などを一覧にしたものであるが、これによって、右の六つの大分類を、さらに細かく分類すると、以下の一四項目に分けることができる。以下①～⑭を細分類番号とする。

① 藩主家の吉凶禍福（冠婚葬祭・叙位・高直・初出仕・御目見・前髪執・相統・改名・領地・病氣）など（史料3等）

② 蝦夷地警備関係（史料4等）

③ 参勤交代・東京往来（史料5等）

④ 高照神社関係（史料7等）

⑤ 幕府拝領品・献上品（史料8等）

⑥ 天皇家・即位・崩御・改元（史料10等）

⑦ 將軍家の吉凶禍福など（史料11等）

⑧ 江戸屋敷（東京邸）・京都屋敷など（史料12等）

⑨ 公役（普請）（史料13等）

⑩ 幕末京都警衛関係（史料16等）

⑪ 幕末江戸警衛関係（史料19等）

⑫ 戊辰戦争・函館戦争関係（史料21等）

⑬ 明治新政府からの指示など（史料23等）

⑭ 天皇家拝領品・献上品・天機伺など（史料25等）

以上の一四項目であるが、一通の「御告書付」に右の内二項目を含んでいるものもまま見られる。史料6（細分類番号①②）、史料18（①③）、史料9（②③）、史料17（②⑩）、史料14（③⑤）、史料26（③④）、史料15（⑤⑨）、史料22（⑥④）、史料20（⑩⑪）、史料24（⑫⑬）などがそれに当たる。

さて、右の内容分類をもとに、それぞれの項目が何回実施されていたのかを示したのが表2である。「御告御用」実施の傾向を、御告内容から知ろうとしたものであるが、この表2と前掲表1から導かれる基本的事項は次の通りである。

a. 藩主の動向の報告が基本にある。（細分類①③）

b. 江戸での出来事の報告が多い。

c. 幕府や他藩など外部との交渉が生じるとき（北方問題の発生と対応、幕末期の動向、対幕府・朝廷関係等）に行われることが大半であり、藩独自の出来事については殆どない。

d. 参勤交代（名代下向）と蝦夷地警備の組み合わせが多い。

e. 巡検使については見当たらない。

f. 高照神社関係の御告は少ない。

などであるが、aについて付言すれば、廃藩後は殆ど津輕家の動向（叙位・移動・冠婚葬祭等）に限られてくる。これは、史料1の最後の部分に見られるように、伯爵津輕家との縁故とともに、同家からの経済的援助によって維持されていたからであろう。またfについては、結局のところ御告の内容が藩によって決定されるものであり、神社側の意向の入る余地がなかったこと、及び「御告御用」の範疇からすれば、高照神社そのものよりも御告先としての高照神社の機能の方がより重要と認識されていたからであろうと考えられる。

（二）「御告御用」の回数と年代

次に「御告御用」の実施を年代別に整理することで、その時代的特徴を見ていきたい。表3は高照神社蔵「御告書付」二五七通について年代別に整理し、併せて『国日記』に見える御告関係記事についても比較のため、その回数を示したものである。

表1で示したように、高照神社に残る最も古い「御告書付」は享和元年一〇月三日（史料3）のものであり、最も新しいものは大正八年四月五日（史料27）のものである。年代を特定できないものが一四通あるが、いずれも江戸期のものであることから、享和～慶応までの六七年間で一四五通、明治～大正期が六二通となっている。

一方『国日記』によれば、高照神社創建時の正徳二年五月三日（史料

29)が最初。その後宝暦五年に一度(史料30)、寛政元年に三度(四月一七日・五月一六日・同二五日、史料32①・②・33)あるだけで、享和二年一〇月一五日(史料34)に至る。表3はこの享和年間以降、『国日記』の記述の終わる慶応年間までについて示したもので、六七年間で四二八回確認される。

さて、これによれば、「御告御用」の頻度は一〜二カ月に一回程度、また時期的には北方問題発生時と幕末の混乱期に多い、という点を指摘できる。このような回数を消化していくには、それなりの組織や手続きが確立されている必要がある。これについては直接このことを示す史料は見当たらないが、『国日記』をもとに次章で多少言及したい。

ところで、「御告書付」の残存状況についてであるが、「御告御用」の開始は『国日記』に見える正徳二年であるが、寛政年間までは数える程しかなく、享和年間以降毎年のように実施されている。従って年代的に見る限り、享和年間以降を本格化の段階と見做してもよく、本来的な残り方であると考えられる。また、全てが残っているとは考えられないものの、年次的に残存状況を見ると『国日記』の頻度に近い推移を示しており、妥当な残存状況にあると言える。なお『国日記』との回数比較をした時、安政年間以降『国日記』の回数に近い数値、ないしは上回る数値を示していることから、特に安政期以降の残存状況が、それ以前に比べてよいと言える。

それでは、実際に「御告御用」が行われていた期間はいつからいつまでなのであるか。これまで見てきた所から、その最初は『国日記』の正徳二年五月三日、最後は高照神社「御告書付」の大正八年四月五日で

ある。始まりについては、時期的には正徳二年が高照神社創建直後であること、内容的には信政の跡を継いだ五代信寿が朱印状を幕府から戴いたものであることから、その開始をこの時点に求めても差し支えないであろう。終わりについては、今後大正八年以降の「御告書付」が新たに発見されることで変わるとも考えられるが、この時の内容は弘前藩最後の藩主、一二代承昭の嗣子英麿の死去を御告したものであり、しかも大正年間の御告内容は表1に示したように、大正五年七月の承昭の死去、同年八月の英麿の襲爵、そしてこの英麿の死去であることから、現段階ではこの時点が「御告御用」の最後と考えてもよいのではないだろうか。以上から、「御告御用」が継続的に実施されてくる本格化は享和年間以降であるが、実施期間としては正徳二年から大正八年までであり、それは四代信政没後の高照神社創建時から、一二代承昭の嗣子英麿の没年までの期間であつたと考えられる。このことは、「御告御用」の内容が藩主家の動向を基本としていたことを象徴的に示していると言えるのではないだろうか。

(三)「御告御用」勤仕者

ここでは「御告御用」勤仕者とその役職名について見ていきたい。「御告書付」の本紙には勤仕者名は記されていないが、包紙の上書には「御告書付」と記された以外に、異筆で年月日、内容の要点(注記)、そして「・・・勤之」として勤仕者名がその役職とともに記されていることが多い。整理のために高照神社関係者が記したものであらうと考え

られる。

表4は、その包紙の上書をもとに職名のわかる一九一回の「御告御用」について、役職ごとにまとめたものである。一つ一つについては表1も参照されたい。

表5は、享和二年から文政二年までの『国日記』に見える勤仕者の職名の判明する「御告御用」一三四回について、御告先ごとに区分したものである。なお、御告先についての検討は次章で述べることにする。

さて、この表4・5によれば、家老による「御告御用」も見られるものの、大きくは、御手廻組頭（四百石・番方・五組）、御馬廻組頭（三百石・番方・七組）、及び高照神社祭司の三職で行われている。表4の高照神社「御告書付」では、祭司が一三二回六九%と圧倒的に多いが、表5では当然のことながら高照神社における「御告御用」のみに限られており、従って高照神社固有の状況と見てよい。ただし、明治以降の状況を表1から詳細に見てみると、その殆どが祭司（明治三年頃以降は高岡掛、さらに祠官、御廟所御用取扱人、社掌と職名変化）となっており、この分を差し引けば八七回が祭司による「御告御用」となる。これらの点を考慮すると、高照神社に限ってみれば祭司が中心に「御告御用」を勤めていたと見ることができるとする。全体からすれば、御手廻組頭と御馬廻組頭がこの役目を担っていたとすることができる。さらには、この両組頭の中でも、特に御馬廻組頭がその中心であったとすることができる。この点を補完する史料に『御用格（寛政本）』³がある。宝暦三年の史料46と天保一三年の史料49によって検討することにした。史料46によれば、高照神社への「御告御用」担当者は両組頭であり、「申合」

によって本順と控の順を決め、遅滞のないようにすべき旨が申し付けられている。すなわち両組頭が本来的な勤仕者であったことが確認される。その意味では、表5の方がより勤仕者の実態を示していると言える。これについては、両組頭による「御告御用」とはいいながら、人物名が特定化されていないという傾向からも言える。表1によれば確かに同一人物が何度も行っている場合もあるが、ばらつきの方が目立つ。両組合わせて一二組あるわけであるが、その内の誰ということではなく、やはり本順、控えの順とあるように「御告御用」は両組頭に付いた役割であったとすることができるのである。

それでは、何故この両組頭が「御告御用」の担当となったかであるが、史料28に見えるように、延宝八年一月以降、毎月五日が御手廻組頭、一四日が御馬廻組頭によって長勝寺への代参が行われるように定められたことが「御告御用」にも引き継がれていったものと考えられる。五日は藩祖為信の、一四日は二代藩主信枚の命日であり、本来藩主が行うべきものとして基本的に位置付けられていたものが、その実施の定型化によって藩主名代による実施となっていたのである。御告もまた史料36に「御名代御告」と見られることもあるように、本来的には藩主による行為であったのである。

ところで、「御告御用」の原則が両組頭であるにもかかわらず、何故祭司役による「御告御用」の回数も多く見られるのであろうか。史料49によれば、御告内容によってこれまで両組頭の内から申し付けて来たが、以後「御省略年限中」は全て祭司役が勤めることとし、「重キ儀」については「沙汰之上」祭司役に申し付ける旨が記されている。これは天保

一三年以降についてのものであるが、それ以前においても、内容によって、また財政状況によっては祭司役が勤めて来たことをも十分推察させる。実際表1や表4に見えるところの祭司役による「御告御用」の事実がそれを示している。当然のことながら、祭司役が用いた「御告書付」の方が、高照神社において残りやすかったということもあるのではないだろうか。これらのことから統計上出て来たのが表4と5の数値であろうと考えられるのである。

次に、御告内容と御用勤仕者の役職との関連性について触れておきたい。御告内容によって勤仕者の役職が変わるのかという点である。表1を見る限りにおいては何ら関連性を見い出せない。また、同じ日に二つ以上の御告が行われる場合などは、それぞれ別の「御告書付」に記されるが、御用勤仕者は殆どが同一人物であり、内容によって役職の違う人物が行うという傾向は見られない。このことは『国日記』において見た場合も同様である（後掲『国日記』史料参照のこと）。しかしながら、御告内容と勤仕者の役職が全く関係ないとするのも、あながち断定できない。史料49で見たように、そこには「品二寄両組頭之内より被仰付来候」とあり、また「重キ儀は」という文言も見られる。さらに、両組頭による「御告御用」とはいいいながら、御手廻組頭に比べて御馬廻組頭の御用回数が極めて多いということも、単純に、本順・控えの順からだけでは説明がつかないからである。「御告御用」に関しての細部にわたる規定があったのかも知れないが、現段階では史料46の両組頭の「申合」の結果としか述べられない。ただし、勤仕者が家老である時については、その御告内容に一定の傾向を見い出すことができる。次章でも御

告先との関連で多少触れるが、それは高直りと藩祖為信の大法会に限られているという点である（史料35・36）。藩主家にとっては最重要の事柄であり、特に家老が当てられたものと言える。

以上、「御告御用」の勤仕者については、本来的には藩主の名代であったこと、御告内容との明確な関連性は見い出せないものの、御手廻組頭と御馬廻組頭が原則であり、何れが行うかについては両者の「申合」によって順序が定められていたこと、従って人物によって定められたものではないこと、高照神社においては祭司役による「御告御用」も多く見られたこと、御告内容によっては家老が当てられたこと、等を指摘できる。なお、両組頭の職務という観点からこの「御告御用」を見た時、五日と一四日の長勝寺への代参とともに、極めて頻度の高い重要な職務であったとすることができる。

（四）「御告御用」の実施日と「御告」内容の日

ここでは、実際に「御告御用」の行われた月日と内容の月日について、表1によって見ていきたい。

前述したように、江戸での出来事についての御告が多く見られるが、この場合大半は約三週間遅れとなっている。江戸―弘前間の参勤交代の日程は概ね一八日―一九日程度であり、ほぼこのスピードで御告内容もたらされ、実施されたものと考えられる。ただし、緊急の場合もあったようであり、蝦夷地関係の内容などは一〇日程で実施されている。しかし、何れにしても御告のために、あるいは御告を第一義としてもたら

された情報ではないはずであり、通常の江戸―弘前間の情報ルートがまずあり、その上で御告内容の選択がなされたと考えるのが藩政上妥当であろう。

なお、「御告御用」の即日実施は、江戸へ向けての国元からの発駕と、国元への到着日にはほぼ限られている。

明治以降、電信の発達が見られてからは、郵便や電報などで情報もたらされ、御告が行われることもあったようである（史料27）。

（五）「御告書付」の様式

第三項で若干触れたが、ここで「御告書付」の様式についてまとめておきたい。

本紙は折紙であり、「御告之覚」に続いて内容を記し、最後に月日が記されている。ただし年号の記載はない。文末はいずれも「申来候」、あるいは「被為蒙仰候」などが基本であり、今後の方針等、将来にかかわる事柄についての記載は全くない。あくまでも直前に生じた事項についての「報告」となっている。従って藩主に対して重臣が政務報告をする内容と一致する。本紙に差出人と宛名がないのもそのためであり、信政が生きていた時に行われた行為がそのまま引き継がれていると考えられる。

本紙の大きさは概ね縦約三六センチ、横約五〇センチであるが、廃藩後に実施主体が藩から神社に移った頃から、大きさが小さくなり、また折紙が切紙に変わる傾向が見られる。これにともない、「御告之覚」が

単に「御告」と記載され、また記事内容の簡略化も見られる。このほか、年号が記載されるなど、様式の統一性が若干崩れてくるが、御告内容には基本的な変化は見られない。

次に包紙であるが、上書には本紙と同じ手による「御告書付」と記されているほかに、例えば「御高直御札之義、文化六己巳年正月廿日、御手廻組頭棟方作右衛門勤之」（表1 No.7の包紙）と異筆で記されている。内容の注記・実施年月日・勤仕者名とその職名以外の記載はないが、高照神社で整理・保管のために書き加えたものと考えられる。これは包紙のこの部分だけを見ると同筆のものが多くことから推察できる。祭司役による記載かどうか特定する材料はないが、高照神社関係者によることだけは言えると考えられる。またこの点からさらに言えることは、「御告書付」そのものは、藩の書き役によって書かれたものが神社にもたらされたということである。この点については、次章の「御告御用」実施に至る過程の所でも見ていきたい。

なお、廃藩後の包紙の上書についてであるが、本紙と同様の傾向を示すとともに、御告主体が神社に移ったことを反映して、包紙・本紙ともに全て同一人物の手によるものがま見られる。包紙に年月日がないものでは、本紙に年月日が入っているものがあることなどを考え合わせれば、先に見た様式の統一性の崩れは、作成者の違いにその要因を見出すこともできると考えられる。

二 『国日記』に見える「御告御用」

(一) 御告先について

前章では高照神社蔵「御告書付」の分析を通して、「御告御用」の内容や特徴について見てきたわけであるが、ここから導かれる点は、基本的には高照神社における「御告御用」である。本章ではさらに『国日記』に見える記述を分析することで、「御告御用」の全体的な姿により迫ることにしたい。

さて『国日記』に見える「御告御用」については、既に表3・5において、実施回数と年代的特徴、勤仕者の役職について見てきた。そこでは回数・年代ともに「御告書付」とほぼ同様の傾向にあり、享和年間以降本格化されたこと、勤仕者は両組頭が基本であり、特に御馬廻組頭がその大半を占めていたことなどが明らかとなった。従って「御告御用」の内容もまた「御告書付」と同様の傾向にあると考えて差し支えない。

ところで、表5に見えるように、「御告御用」は高照神社のみで行われたものではなかった。そこには、長勝寺・報恩寺・革秀寺・津梁院の寺院名が確認される。何れも藩主家の津軽家とかかわりの深い寺院ばかりである。

長勝寺（曹洞宗）は、藩祖為信によって津軽家の菩提寺及び領内曹洞宗の僧録所と定められたことで知られる。津軽氏の出自については不明な点が多いが、津軽家の多くの系図で氏祖とされる大浦光信の菩提を弔うため、子の盛信が種里村（現鯉ヶ沢町）に創建したとされる。その後

居城の移転にともない、為信の代に賀田村（現岩木町）、さらに堀越（現弘前市）に移転。次いで二代信枚による弘前城築城により慶長年間に現在地に移っている。三代信義の時に藩主家の宗旨が天台宗に改められたため、菩提寺が報恩寺に移ったが、文政八年には光信の三百回忌、安政三年には為信の二五〇回忌の大法会が行われるなど、その後も先祖崇拝の中心寺院としての位置を占めていた。報恩寺（天台宗）は信義の菩提を弔うため明暦二年に信政が創建。長勝寺に代わって津軽家の菩提寺となるとともに領内天台宗の僧録所でもあった。開山は寛永寺内にある津軽家の江戸における菩提寺の津梁院から分骨を報恩寺に持参した本好。三代から一代まで歴代藩主の菩提寺として尊崇されている。革秀寺（曹洞宗）は二代信枚が為信の菩提を弔うため位牌所として創建したとされ、藩祖為信の廟所として歴代藩主の崇敬が厚かった。津梁院（天台宗）は寛永寺開山天台の弟子であった信枚が葬られた浅草常福寺から、寛永年間にその霊を信義が移して創建した寺院であり、以後江戸における津軽家の菩提寺となっている。⁽⁴⁾

以上が御告先となっている寺院の概要であるが、何れも津軽家の祖先崇拝の中心寺院であることがわかる。宗派は曹洞宗と天台宗であるが、ともに藩主家の宗旨であった（曹洞宗↓天台宗）こともその背景にあると考えられる。さらに、津軽氏の氏祖とされる光信から二代信枚までの長勝寺・革秀寺と、三代信義以降の国元における報恩寺及び江戸における津梁院に区分される。ただし前者は長勝寺が創建時の事情から主要な菩提所とすることができよう。

さて表6は「御告御用」初出の正徳二年から文政二年までの御用回数

について、その内訳を御告先ごとにまとめたものである。御告先が併記されている所は、同じ内容の御告が同じ日にそれぞれ実施されていることを示している。この表から読み取れる主な点は以下の通りである。

a. 寛政年間までの「御告御用」は高照神社においてのみである。

b. 享和年間以降、御告先に長勝寺が加わり、以後長勝寺と高照神社への「御告御用」が基本となる。

c. 報恩寺と革秀寺については単独の「御告御用」は見られず、また回数も極めて少ない。

d. 津梁院については全て単独の「御告御用」である。また文化六年以降継続性が見られる。

以上の諸点であるが、具体的にこれらについて検討していきたい。

まず a・b について。史料 31 によれば、既に天明六年に八代信明婚礼について長勝寺と高照神社に名代が遣わされているが、「御告」の文言もなく、『国日記』の他の「御告御用」に関する記載と比較すれば、長勝寺・高照神社への御告併記の初出とすることはできない。その初出は享和二年一〇月一五日の江戸表大川端御抱屋敷拝領地に関する「御告御用」である（史料 34）。また『国日記』への記載の仕方であるが、a の段階までは高照神社「御告書付」に見られるような「御告之覚」がそのまま記載されているが（史料 30・32・33 等）、b の段階以降それは見られず、一般的な『国日記』の記載の中で「右二付」として御告先と勤仕者名が記載されるようになる（史料 38・39 等）。簡略化の方向であるが、これは「御告御用」の回数の増加とそれともなう藩政における一般化、さらには定型化がこの背景にあると考えられる。前章で述べた所の、

「御告御用」の本格化が享和年間以降であるという点を補完する。さらに『国日記』中に見える御告先の記載順が全て長勝寺→高照神社の順になっていることも見逃せない。「御告御用」は高照神社から始まったものの、長勝寺が加わったことで、御告先の筆頭が長勝寺に定められたことを意味している。すなわち、この時点で御告先の基本線が確定し、「御告御用」本格化の段階に入ったのである。

c について。報恩寺への「御告御用」が少ないのは、先述したように三代藩主以降菩提寺となった寺であったことがその理由だったのではないだろうか。すなわち、御告は藩主が祖先に対して行うことが本筋であり、津軽氏の氏祖に直接つながる長勝寺が最もその対象としてふさわしいものと位置付けられていたと考えられるのである。前述の、長勝寺が高照神社の上位に位置付けられた点とも連動する。史料 41-①では「長勝寺・高岡・報恩寺」の順になっている。ただし、どのような場合に報恩寺が御告先とされるかについては明確にし得ない。報恩寺への御告は文化二年五月二十六日（史料 35）に「両御寺（長勝寺と報恩寺）」として出てくるのが最初であるが、それは七万石高直りに関してのものであり、また次に御告が命じられた文化六年二月三〇日の内容は七代藩主室の貞寿院逝去に関するものであり（史料 41-①）、内容的には報恩寺に特定されるようなものではないからである。それよりここで注目したいのは、貞寿院逝去について、長勝寺・高照神社・報恩寺に「御告御用」が命じられたにもかかわらず、実施日の同年三月二日には報恩寺において「御告御用」が行われなかったという点である（史料 41-②）。何故当初の御告先から外されたかについては明確にできる史料をもたないが、これ

以後、御告先に報恩寺が見られないこと、及び文化五年一二月の一〇万石高直りに関する御告先（同六年一月二〇日実施、『国日記』同日条）にも報恩寺が含まれていないことから考えると、文化二年五月の「御告御用」が唯一のものであるとすることができないのではないだろうか。七万石高直りは「御告御用」開始以来、藩主家にとつては最大の吉事であったことから、一旦は報恩寺への御告を実施したものの、以後は長勝寺と高照神社に限定する形をとつたものと考えられるのである。

次に革秀寺についてであるが、文化三年七月二五日の「御告」（史料36）の一度だけである。この内容は藩祖為信の二百回忌についてのものであり、従つて為信の位牌所である同寺へも御告が行われたと考えるのが自然である。すなわち、御告内容によつて革秀寺が御告先となつたということであり、恒常的な御告先とすることはできない。

以上、報恩寺と革秀寺に関しては、特定の内容をもつた時の御告先であり、しかも一回きりの「御告御用」であつたと言える。勤仕者については前章（三）で述べておいたが、報恩寺と革秀寺が御告先に加えられた時は何れも家老がこれを勤めている。家老による御告は表5によれば五回しかないが、長勝寺の二回は報恩寺（文化二年）と革秀寺（文化三年）とともに行われた時のものであり、高照神社の一回は文化六年、報恩寺が御告先から外された時のものである。すなわちこの勤仕者からも特定の内容に限つて報恩寺と革秀寺が御告先に加えられたと考えることができるのである。従つてこのcの特徴からも、御告先の基本は長勝寺と高照神社であつたとすることができる。

dについて。津梁院は江戸における津軽家の菩提寺であり、また御告

内容で見たように江戸での出来事も多いことから、御告先に選定されたとしても何ら不思議はない。史料42・43は、津梁院での「御告御用」についてのものであるが、これによれば、まず津梁院において「相勤申候」として「御告御用」が実施された旨が記載され、次に長勝寺・高照神社においても「可被仰付候」として指示が出され、その結果、翌日以降、長勝寺・高照神社において「相勤之」として実施された旨が記載されている。表6に見える文化八年以降の津梁院における御告内容もすべて同様であり、「津梁院↓長勝寺・高照神社」という流れが見てとれる。また史料42の「長勝寺・高岡御告之儀前々之通可被仰付候」と、史料43の「其御地御告之儀前々之通可被仰付候」とは全く同義であることから、国元での御告先は長勝寺と高照神社であり、そこでの御告は既に固定化されていたものと考えてよい。史料45がそのよい例であろう。ただし、常に「津梁院↓長勝寺・高照神社」というパターンであつたと結論づけるには、津梁院への御告回数が全体比であまりにも少な過ぎる。しかしながら、津梁院での御告内容が、藩主家（細分類①③）と将軍家（同⑤⑦）に限られていることを考えるならば、国元での御告先が長勝寺と高照神社に確定して以降は、御告内容に規定されながらも、御告行為が江戸の津梁院にまで敷衍したものと考えることができるのではないだろうか。『国日記』への記載における長勝寺・高照神社への御告の初出（享和二年）と津梁院への御告の初出（文化六年）の時間差は、この点から来ているものと考えられるのである。なお『国日記』には全く見られないものの、「長勝寺・高照神社↓津梁院」という逆の流れも当然あつたのではないかと推測できる。これについては今後史料調査が必要となる

が、現段階では、長勝寺・高照神社への「御告御用」が基本であるという点、国元の菩提寺である報恩寺でさえ御告先から除かれているという点から、その可能性は少なく、あったとしても頻度的には「津梁院↓長勝寺・高照神社」よりは少なかったであろうと考えている。

以上、表6をもとに御告先について見てきたわけであるが、報恩寺・革秀寺への御告についてはその内容からきているものであり、また津梁院は長勝寺と高照神社への御告が確定して以後、江戸における御告先として加えられたものであった。従って、御告先は長勝寺と高照神社が基本であり、長勝寺が御告先に加わり、かつ「御告御用」において高照神社の上位に位置した享和年間以降、本格的に「御告御用」が開始されたとすることができる。その意味で「御告御用」は藩主家の宗旨如何でその御告先が決まったのではなく、津軽家の祖先に直接つながっている菩提寺としての長勝寺が最も重要な御告先として選定されたのである。なお、高照神社への御告については、正徳年間以降の継続性はもちろんであるが、本稿冒頭に述べたように、同社の建立された高岡の地には、藤原氏の氏神を祀る小社があったとされることから、藤原姓を名乗った津軽氏にとっては祖先崇拜に直接つながる神社として位置付けられていたからと考えられる。ただし、四代信政のその後の神格化についての問題も含み、今後この視角からの「御告御用」の検討も必要とされるが、これについては課題としておきたい。

(二)「御告御用」の実際

ここでは、「御告御用」がどのような流れの中で実施されていたのかについて見ていくことにする。

まず、勤仕者であるが、前章で既に検討したように、家老は特別として、両組頭の「申合」をもとに、また高照神社の場合は祭司役を含めて選定される。勤仕者への申し渡しは、史料38（文化四年）に顕著に示されるが、それぞれの御告内容ごとに、また御告先ごとになされており、史料30では実施日の前日に「切封之切紙」、あるいは「書状」、史料32-②でもやはり前日に「手紙」をもって申し付けている。この場合、何れも「御告御用」実施日である翌日の日付の入った「別紙」、すなわち折紙の「御告書付」も一緒に遣わされている。なお「書状」と「手紙」は同義でありその時勤仕者に当てられた祭司が高岡に居たことからこの手紙が取られたと考えられる。直接家老から仰せ付けられる場合もあり、史料37では、同じ内容ではあるが、長勝寺への高倉六郎次郎（御手廻組頭）は芙蓉之間、高照神社への後藤理右衛門（祭司）は鷺之間で仰せ付けられている。この場合「御告書付」はこの時に渡されたものと考えられ、従って「御告書付」は藩の書き役によって認められたとすることができる。

御告実施日と勤仕者が決まると、史料32-①・44にあるように、「諸事差支無之様」に関係者に対して手配されることになる。史料44によれば、長勝寺の場合は寺社奉行、高照神社の場合は祭司と在番御使番が担当している。

勤仕者への対応はかなり儀式的であったようであり、文化五年の史料40の後半部分によれば長勝寺に両組頭が「御告御用」で来た時は「玄関式台江罷出、高岡同様両手を突、頭を下ケ罷有候様ニ被仰付」ている。

また「高岡同様」とあることから、長勝寺の「御告御用」は高照神社を先例としていたこともわかる。ただし同史料前半部分によれば、それは長勝寺への「御告」が開始された直後からの状況ではなく、当初は「御名代先々之通仕候」とあり、その後「高岡御告御用振合ニ而相勤」となり、この時点以後「高岡同様」に仰せ付けられた推移が読み取れる。つまり、当初は長勝寺において「御告御用」の先例が無かったために、社参名代の仕方に倣っていたが、「御告御用」ということで高照神社に倣うことにしたものの、間違いがあつてはならないため確認した所、「高岡同様」となったのである。このことから享和二年の開始から文化五年のこの時点までの長勝寺への「御告御用」は、形式的な面で確定していなかったことを指摘できる。表6にも見られるように、長勝寺への「御告御用」は文化三年までは年一回だけであり、ようやく翌四年からその回数が多くなっている。長勝寺が御告先に加わったということで、享和年間から本格的に「御告御用」が始まったとしてきたわけであるが、その形式が確定してきたのは、少し遅れて文化四・五年からとすることができのではないだろうか。なお、高照神社の祭司においては、神事とともに「御告御用」も伝授の対象となっており（史料47）、その形式、儀式の方法は単純なものではなかったことが推察され、寺社奉行の戸惑いも大きかったものと考えられる。また、史料48から両組頭に対して掃除小人の貸し付けがなされていたことも知られる。単純な形式が採られ

なかったことを考えるならば、勤仕者が一人で出掛けたとは考えにくく、相応の従者を引き連れることが必要だったのである。

次に、御告内容の決定について検討したい。前章（三）でも述べたように、史料49によれば、内容には「品」や軽重があつたことが知られる。そしてそれが、御告先や勤仕者の役職と関連性があつた点についても述べてきた所である。従つてそこには何らかの基準なりがあつたことが伺われるが、残念ながらそれを示す史料は見当たらない。丹念な事例の積み重ねが必要なのであるが、管見の限りではその事例も史料45しか見当たらない。

同史料には、先例ではこれまで將軍家若君以外の誕生については国元での御告は実施しておらず、現將軍の家慶の時も「御台様御養」であつたことからそのようにしてきた。文政二年七月二三日に誕生した家慶の子の登次郎についても同様に扱ってきたが、同年九月八日に嘉千代と改名、併せて「御簾中様御養」と御広めがあり、諸事若君同様の扱いとなつた。そこで用人へも評議を申し付けた所、このことは若君となつたということであり、何れ御告があつて然るべき内容であるという結論を得、伺いを立てた結果、若君同様の扱いとすべき仰せがあり、一月一八日に津梁院で御告を実施し、一二月三日に国元でも実施すべき旨仰せ付けられた、という内容が記載されている。そして実際、翌四日に長勝寺と高照神社において御告が行われている（史料11）。

このことから、御告内容の基準に若君誕生があり、誕生という項目については若君に限るという基準に合わない場合には、御告から除外していたことがわかる。そしてそのような基準が、多くの項目においても定

められていたと考えられる。それではどの時点で基準が設けられたのであろうか。事例的には同史料のみであり、推測の域は出ないものの、御告開始当初からの基準を定めていたとは考えにくい。恐らく御告すべきような内容が生じた時に、その内容が含まれる項目に関してその都度評議が持たれ、一定の基準を定めていったのではないだろうか。右の事例の場合、状況が変化してから結論が出て実施に移されるまで二カ月以上要していることから、その時々には基準決定の議論があったものと考えられる。それ故に先例の詮議も行われたのである。そして、その最終的な判断者は、同史料にもあるように藩主であった。それは御告勤仕者が基本的には藩主の名代であったという点からも言及できる。また具体的な検討は家老によって行われ、時として用人も加わっていたことも同史料から知られる。従って勤仕者への申し渡しが家老からであった(史料37)ことも考え合わせると、御告内容・御告先・勤仕者の決定など、「御告御用」の根幹にいたのは家老であったと言えるのではないだろうか。御告内容によっては家老が勤仕者となっていたのであり、「御告御用」の差配は家老によって行われていたのである。

おわりに

以上、高照神社蔵「御告書付」と『国日記』の「御告御用」関係記事の分析を通して、「御告御用」の基礎的な考察を行ってきた。最後に、藩政上「御告御用」がどのような位置付けをもつのか、その意義について見通しを述べてみたい。

この場合、参考としたいのが長谷川成一「近世北奥大名と寺社」⁽⁶⁾である。氏は弘前八幡宮文書(弘前大学蔵、元禄六年~明治四一年)に見られる祈禱内容とその回数の分析を行い、寛政元年以降の祈禱内容に蝦夷地渡海安全祈禱と国家安全祈禱が加わり、さらに蝦夷地警備が本格的に始動した寛政九年以降の蝦夷地渡海安全祈禱が藩主平癒祈禱と同格の重き祈禱となったことを指摘している。そして、藩当局が体制的危機を回避する願望を込めて命じたものが祈禱であり、その遂行が寺社の役務であるとし、蝦夷地警備においてその寺社の役務が最も顕著に遂行されたとしている。周知のように、弘前藩の蝦夷地出兵は、寛政元年の国後騒動、同四年のラクスマン来航による派兵下命を経て、同九年以降蝦夷地常駐を強制される勤番体制がしかれる。すなわち、弘前八幡宮の祈禱内容にもこの動向が反映していたのである。

「御告御用」もまた、これまで見てきたように、御告回数や御告先の固定化からしてその本格化は享和年間以降であり、さらに御告内容から見ても、祈禱内容の変化と同様、その背景に蝦夷地警備が本格化していた状況があったとしてよいのではないだろうか。

この時期の藩主は弘前藩寛政改革を実施したことで知られる九代寧親。改革の中心政策は「藩土土着」政策であるが、その背景にはやはり蝦夷地警備の問題があった⁽⁷⁾。結果は失敗に終わるが、その後の蝦夷地警備を精神面で強化していく方策の中に、この「御告御用」が導かれてきたと考えることができるのではないだろうか。史料1に「越中守津軽寧親公、文化七年隨神御門ヲ建設セラレ、同十年御廟所御門ヲ建設セラレテヨリ、愈設備完成スルニ至リヌ、此他妻々修繕ヲ加フル等、神威発揚ヲ

シテ遺憾ナカラシム」とある。ここに見られる「神威発揚」は後世の評価ではあるが、蝦夷地警備の中で、長谷川氏の指摘する、藩体制の維持・強化のために寺社が積極的に参加させられていく状況と重ね合わせるとき、この「神威発揚」は極めて意図的な政策であったとすることができるのである。すなわち、祈祷内容の変化と同様、「御告御用」もまた対外危機を契機とした藩国家の危機への対応として捉えられるのであり、藩国家における対外的危機認識を収斂するものとして機能したと考えられるのである。

注

- (1) 史料1、及び『高照神社』（青森県立郷土館特別展「高照神社宝物展」図録、平成四年六月）。
- (2) 『高照神社所蔵品目録』では、二五三件二五六通としているが、史料番号B-7-187は、年月日は同じであるが、内容の異なる二通となっており、本稿では二五七通として扱っていく。
- (3) 長谷川成一校訂『御用格（寛政本）』上巻、弘前市、平成三年。
- (4) 角川書店『青森県地名大辞典』（角川日本地名大辞典2）、平凡社『青森県の地名』（日本歴史地名体系2）、東奥日報社『青森県百科事典』。
- (5) 新訂増補国史大系『續徳川実紀第二篇』二七頁、吉川弘文館、昭和五七年。
- (6) 『日本近世史論叢上巻』尾藤正英先生還暦記念会編、吉川弘文館、一九八四年。

- (7) 浅倉有子「家中軍役規定の改変と蝦夷地出兵」（長谷川成一編『津軽藩の基礎的研究』国書刊行会、一九八四年）、拙稿「寛政改革と藩士土着政策」（同）、浅倉「津軽藩士『在宅』政策について」（長谷川編『北奥地域史の研究』名著出版、一九八八年）。

〔付記〕

・本稿は一九九二年二月六日、弘前大学国史研究会の藩政史研究会での報告をもとにまとめたものである。会員の方々から貴重なご意見をいただいた。また「御告書付」の閲覧については、高照神社氏子の方や、高照神社文化財維持保存会後援会に大変ご便宜を図っていただいた。記して感謝致します。なお、同社の所蔵資料調査は当時県立郷土館研究員であった福井敏隆氏を中心に行われ、氏の転勤後筆者に引き継がれたものであるが、その折「御告書付」の概要と、その分析の必要性をご教示いただいたことが、藩政史研究会での報告の契機となっている。深謝致します。

・本稿の骨格部分については、簡単ではあるが、既に「蝦夷地警備と北奥地域」（地方史研究会編『北方史の新視座―対外政策と文化―』雄山閣、一九九四年）において、蝦夷地の動向と北奥地域の動向が一体化していたことを示す一例として発表している。なお、同書中、『国日記』御告関係記事の回数を示した表3を本稿の表3に訂正（文化年間の回数80→74、合計434→428）するとともに、注（6）において本稿が本誌九七号に掲載予定としたにもかかわらず、本号への掲載となったことをお詫び致します。（たきもと・ひさふみ 青森県広報広聴課総括主査）

史料1 (大正五年「神社創設ノ由来」高照神社蔵)

宝永七年十月、弘前城主津輕信政公弘前城ニ逝去セラル、ヤ、其子土佐守信壽公、其ノ遺志ニ基ツキ、同年十二月当地ヘ神葬、正徳二年当社建設、其ノ英靈ヲ鎮祀セラシ、以来、始終惟一神道ノ式典ニ依リ、祭事ヲ行ヘリ、

(中略)

明治四年廢藩置縣ノ制ヲ布カル、ニ至ル迄、旧藩主津輕家ノ代々宗廟トシテ直祭崇敬セラル、処ニシテ、毎年正月御太刀御馬代ヲ奉納セラレ、常ニ神馬ヲ飼養シ大祭ニハ祓ヲ誦シ、奉幣鳴弦神樂ヲ奏シ、神馬牽入等ヲ行ハレ、親シク札拝セラル、

(中略)

享保十三年、信壽公広大ナル社地境内ヲ定メ、靈地トシテ乞食非人ノ徒入ルヲ嚴禁セラレ、同十五年ニハ神領トシテ良田美地參百石ヲ寄附セラル、其ノ收納ハ年々金ニ換ヘ、城中御金藏ニ納メ、高岡御用金トシテ神社経営ノ他ニ使用セラルコトナシ、若シ他ニ使用セラルコトアレバ、御借用金トシテ他日返還補充セラル、ヲ常トス、爾來代々ノ藩主其志シヲ繼キテ廢セザリシカ、宝曆年間ニ至リ、乳井貢藩政ニ関与セルヤ、一時紊乱ヲ來セシコトアルモ、数年ナラズシテ旧ニ復スルヲ得タリ、

(中略)

越中守津輕寧親公、文化七年隨神御門ヲ建設セラレ、同十年御廟所御門ヲ建設セラレテヨリ、愈設備完成スルニ至リヌ、此他妻々修繕ヲ加フル等、神威發揚ヲシテ遺憾ナカラシムト共ニ、一方資金ノ充実ヲ計

リ、毎年蓄積シテ明治時代ニ至ルマテ代々藩主其ノ志ヲ繼ギ、永続シテ絶ユルコトナク巨額ノ資金倉庫ニ充テリト聞ケトモ、今ヤ其支途ヲ審カニセス、明治三年神領廢止セラレ、倉裏米百表ヲ給セラレ、尋テ止メラル、是レヨリ神社経営漸次困難陷レリ、同四年春日神社合祀セラレ、同六年ニハ草創以來殆ント二百年社地境内トシテ壯嚴ヲ保チ來リシ數十町歩ノ森林モ亦縮少セラレテ、僅カニ現在境内地一町九反畝歩ヲ残スノ悲況ニ陥リ、(中略)、同年社格ヲ定メ郷社ニ列セラレ、附近村々ノ産土数神社合祀シ、共同其経営ニ当ルコト、ナリタレト、旧慣容易ニ脱スル能ハズ、出資乏シク宏大ナル社殿建築物ヲ有スル当社到底其維持ニ堪ヘズ、僅カニ旧縁ニ依リ伯爵津輕家ニ頼リテ修繕ノ資ヲ請ヒ、祭典費ノ補助ヲ受クルト雖モ、次第ニ荒廢ニ歸シ、祭儀亦旧ノ如クナラズ、同十年藩祖為信公ノ神靈ヲ合祀セラレテ、伯爵津輕家トノ縁故ヲ深甚ナラシムルト共ニ、神社ノ威德愈々顯ハル、同十三年県社ニ昇格セラル、

史料2 (同前)

左ノ事項ハ其時々ヲシテ神前ニ報告セシムルヲ例トセリ、

- 一、御即位・崩御・改元、
- 一、公方様相續・將軍宣下・御他界・若君御誕生・御任官、
- 右ノ外、重キ御触レノ事、
- 一、御順見使御領内御順見、
- 一、当神社に關スル凡テノ出来事、
- 一、藩主一家ノ事ニ關スル吉凶禍福、一切ノ出来事、
- 一、其他京都・江戸・藩内等ニ關スル重ナル出来事等、

史料3 (享和元年、表1 No 1)

御告之覚

先月十三日、数姫様、森右兵衛佐様御嫡五郎佐様江御縁組、御願之通被仰出候、以上、

十月三日

史料4 (文化四年、表1 No 2)

御告之覚

奥地場所々江異国船追々参着致候趣相届候に付、用意之人数早々可被差出旨、去ル十八日松前於箱館表、羽太安芸守様より御達書を以被仰付候、以上、

五月廿四日

史料5 (文化四年、表1 No 3)

御告之覚

屋形様、御道中益御機嫌能、去月晦日、被遊御着府候、以上、

六月十五日

史料6 (文化六年、表1 No 6)

御告之覚

屋形様旧臘十七日、御老中様御連名之御切紙御到来、翌十八日御登城被遊候處、於御白書院掾頼、御老中様御列座、青山下野守様被仰渡候者、東西蝦夷地一円之警護、此方様并南部大膳大夫様江永々被仰付、依之御領分御高拾万石御直被下置、且又四品被仰付、愈入精相励可申旨被仰渡候、以上、

正月三日

史料7 (文化七年、表1 No 10)

御告之覚

当月就御大祭、隨身御門御取建被仰付候、

七月六日

史料8 (文化八年、表1 No 13)

御告之覚

正月十六日、於江戸表被遊御拝領候御鷹之鴈被献之候、以上、

三月朔日

史料9 (文化一四年、表1 No 29)

御告之覚

屋形様御不快為御療養御滞府二付、為御名代津輕甲斐守殿被差下度儀、御願之通去ル四日甲斐守殿在所江之被下御暇、蝦夷地御用相心得させ、御快気次第御発駕御国着之上、甲斐守殿致参府候様被仰出候旨申来候、以上、

六月廿三日

史料10 (文化一四年、表1 No 31)

御告之覚

九月廿一日、御即位二付、為御祝儀去月四日、禁裏御所・仙洞御所・中宮御所江御使者を以御進献物首尾好相済候旨申来之候、以上、

十一月六日

史料11 (文政二年、表1 No 42)

御告之覚

此度於西之丸、御男子様御誕生被為在、御名嘉千代様与被進、御簾中

様御養御弘被仰出候段申来候、以上、

十二月四日

史料12 (文政一〇年、表1 No 61)

御告之覚

去月廿日、柳原御中屋鋪就御用御差上、御代地品川領於戸越村被遊御
拝領候、以上、

七月九日

史料13 (天保四年、表1 No 65)

御告之覚

旧臘廿七日、屋形様上野御普請御用被為蒙仰候、以上、

正月十七日

史料14 (安政四年、表1 No 87)

御告之覚

去月十三日、以上使屋形様御国許江之御暇被仰出、其上縮緬十卷、白
銀二十枚被遊御拝領、右為御礼同十五日御登城御礼首尾好被仰上御懇
之被為蒙上意候、以上、

四月七日

史料15 (万延元年カ、表1 No 121)

御告之覚

屋形様今般上野御位牌所并御装束所、御本防向御普請御用無御滯被為
済、右御用被遊御勤候付、去月十五日、御時服被遊御拝領候、以上、

十一月廿一日

史料16 (文久三年、表1 No 137)

御告之覚

殿様来子年、京都為御警衛、四月より六月中被遊御在京候様、御書付
を以被蒙仰候、以上、

七月十一日

史料17 (文久三年、表1 No 140)

御告之覚

殿様御上京御免、箱館御警衛及御領分之防禦御専務相心得候様、去月
八日於京都表伝奏衆より御書付を以被為蒙仰候、以上、

十一月十五日

史料18 (元治元年、表1 No 142)

御告之覚

殿様御不快御快方二付、去月廿五日被遊御出勤、去ル朔日御病後之御
礼并御暇之御礼首尾好被仰上候、以上、

五月十八日

史料19 (元治元年、表1 No 146)

御告之覚

殿様浅草并本所御蔵御警衛被為蒙仰候、以上、

八月十八日

史料20 (元治元年、表1 No 152)

御告之覚

殿様此度御上京被為蒙仰候付、浅草并本所御蔵御警衛御免、御願之通
被為蒙仰候、以上、

十二月廿七日

史料21 (慶応四年、表1 No 168)

御告之覚

殿様今度正月三日以来、於伏見辺大戦争之趣被及御聞候間、人数召連早々被遊御参府候様被仰出候、以上、

二月朔日

史料22 (明治元年、表1 No 179)

御告之覚

今般就御即位、為御祝儀、九月朔日禁裏御所・大宮御所江御使者を以御進献物首尾好相済候旨申来候、以上、

十一月廿四日

史料23 (明治元年、表1 No 180)

御告之覚

去月五日、於京都表非藏人口江出頭可致旨御切紙到来ニ付、同所御留守居罷出候處、石山左兵衛督殿を以、殿様奥州触頭被為蒙仰候旨申来候、以上、

十二月四日

史料24 (明治二年、表1 No 186)

御告之覚

当春御東幸ニ付、天下之候伯、四月中旬を限東京江参着可仕旨被仰出候付、殿様ニも可被遊御登之処、松前御鎮定迄御猶予被為蒙仰候、然處此度同所御恢復に付、来月十日可被遊御発駕旨被仰出候、以上、

五月廿九日

史料25 (明治二年、表1 No 191)

御告之覚

殿様去月七日、御参朝御伺天機首尾好被仰上候、以上、

八月四日

史料26 (明治二年、表1 No 192)

御告之覚

去ル二日、殿様依御用召御参朝之處、被為拝龍顔、天盃御頂戴、御帰藩之御暇被為蒙仰候旨申来候、以上、

八月十五日

史料27 (大正八年四月五日、表1 No 237)

御告

今曉一時、伯爵英磨様薨去被遊候由之電報、弘前表へ到着仕候旨、只今報知有之候條、御告申上候、

史料28 (『国日記』延宝八年十一月四日)

一、自今以後、毎月五日、為御名代長勝寺江御手廻組頭之中一人宛参詣可仕旨被仰出之、

史料29 (『国日記』正徳二年五月三日)

一、毎月十四日、為御名代御馬廻組頭之中一人宛参詣可仕由被仰出之、
一、屋形様、先月十九日御朱印被遊御頂戴候、為御祝儀、今日四時御家中御目見以上登城、屋形様・若殿様御祝儀申上、御広間上之間寄付共二御帳四帳出之、早而於其間々謁御家老中二何茂退出、
一、今朝百沢江善左衛門罷越、右御朱印被遊御頂戴候段、御告申来之、申上之、

史料30 (『国日記』宝曆五年七月七日)

一、明八日於高岡御告御用有之候間、早朝被相越、別紙之通御勤可有之旨、森岡金吾江切封之切紙遣之、

御告之覺

今度御拝殿御造営出来二付、御告被仰付之候、以上、

七月八日

一、明八日於高岡御告御用有之候間、別紙之通可被相勤旨、後藤理右衛門江以書狀申遣之、尤此節同人儀、高岡二罷有候付、以遠使申遣之、

御告之覺

從先年御神領金御拝借之處、今度御拝殿御造営二付、右御拝借御神領金不殘御返納被為済候、以上、

七月八日

史料31 (『国日記』天明六年三月二日)

一、此度御婚禮被遊御整候二付、今朝長勝寺御名代主人相勤候、

一、右二付高岡江之御名代、監物今日相勤候、

史料32 ① (『国日記』寛政元年四月一六日)

一、今日大目付触左之通

覺

屋形様御道中倍御機嫌克、去ル四日被遊御着府候旨申来候二付、右為御祝儀、明十七日四時已前、番頭以上登城御帳記候様被仰付候、此旨被申触候、已上、

四月十六日

大目付中

一、右二付、寄合江申遣候者、明十七日高岡御告御用有之、後藤理右衛門罷越候間、諸事差支無之様、在勤寄合江可被申通旨、通用番江申遣之、

史料32 ② (『国日記』寛政元年四月一七日)

一、右二付高岡御告左之通、

御告之覺

屋形様御道中益御機嫌能、去ル四日被遊御着府候、以上、

四月十七日

但、右御告書付、前日後藤理右衛門江手紙を以申遣之、

史料33 (『国日記』寛政元年五月一六日)

一、屋形様去月廿一日、御参勤之御礼被仰上候旨申来、右為御祝儀、月並以上之面々登城御帳記致退出候、

一、右二付高岡御告左之通、

御告之覺

屋形様去月廿一日、御参勤之御礼被仰上之候、以上、

五月十六日

史料34 (『国日記』享和二年一〇月一五日)

一、去月廿三日、於江戸表大川端御抱屋敷此度御願之通り御拝領地被為蒙仰候二付、為御祝儀御家中御目見以上之面々登城、於其席々申上之、

一、右二付於御次御家老御用人恐悦申上之、

一、今日長勝寺江御告御用、渡部將監相勤申候、

一、於高岡御告御用、山田剛太郎相勤申候、

史料35 (『国日記』文化二年五月二六日)

一、(屋形様七万石高直之義二付(筆者注、以下同) 監物高岡江御告

御用二而罷越、今日出仕無之、

一、今朝於両御寺、御告御用主水勤之、

史料36 (『国日記』文化三年七月二五日)

一、今朝、於長勝寺御名代御告、監物勤之、則左之通、

当十二月五日、式百年就御忌、御靈前江高百石永々被遊御献備

候、

一、於革秀寺頼母勤之、則左之通、

当十二月五日、式百年就御忌、御靈前江倭子五拾俵永被遊御献

備候、

史料37 (『国日記』文化四年五月一〇日)

一、於芙蓉之間頼母申渡之覺

高倉六郎次郎

今日就御発駕、御自分儀長勝寺御告御用被仰付、

一、於鷺之間頼母申渡之覺

後藤理右衛門

右二付、御自分儀高岡御告御用被仰付之、

史料38 (『国日記』文化四年六月一六日)

一、屋形様御参勤之御礼、両御丸江御使者を以御献上物首尾好相濟、

且御国元江之御暇御願之通被仰出、被為蒙上意被遊御拝領候、為御

祝儀月並以上登城、於其席々御帳記之、謁御家老致退出候、

一、右二付、於長勝寺右両様之御告、御馬廻組頭高倉六郎次郎相勤候、

於高岡御参勤之御礼之御告、祭司後藤理右衛門勤之、御暇被仰出候

御告、御手廻組頭大道寺宇左衛門相勤、

史料39 (『国日記』文化五年一月一〇日)

一、右二付(蝦夷地御用拝借金) 於長勝寺御告御用西館宇膳、於高岡

祭司役後藤理右衛門被仰付相勤之、

史料40 (『国日記』文化五年二月二日)

一、寺社奉行申出候、長勝寺ニおゐて御告御用之節、私共并御目付詰

合出勤或ハ先格も無之ニ付、御名代先々之通仕候得共、其後御目付

より申通、高岡御告御用振合ニ而相勤候得共、間違等有之候而者恐

入候ニ付、後々之形如何可仕哉之旨伺申出之、左二、

於長勝寺御告御用ニ而両組頭相勤候節、寺社奉行・御目付出席

区々之様ニ相聞得候間、以来同寺玄関式台江罷出、高岡同様両手

を突、頭を下ケ罷有候様ニ被仰付候、(後略)

史料41① (『国日記』文化六年二月三〇日)

一、貞寿院様被遊御逝去候ニ付、長勝寺・高岡・報恩寺におゐて御告

之儀、御先格之通り夫々可被仰付候、

史料41② (『国日記』文化六年三月二日)

一、右二付、於長勝寺御告御用溝江伝左衛門、於高岡御告御用桜庭半

兵衛被仰付相勤之、

史料42 (『国日記』文化六年四月一七日)

一、右二付(黒石一万石昇格) 於津梁院御告御用津軽直記被仰付、相

勤申候、

一、右二付於長勝寺・高岡御告之儀前々之通可被仰付候、

史料43 (『国日記』文化七年二月)

一、(六日) 右二付(参勤御礼) 於津梁院御告御用高倉六郎次郎被仰付相勤申候、於其御地御告之儀前々之通可被仰付候、

一、(七日) 右二付於長勝寺御告御用溝江伝左衛門、於高岡御告御用後藤理右衛門被仰付、相勤之、

史料44 (『国日記』文化一〇年十一月三〇日)

一、明朔日、於長勝寺高倉六郎次郎、於高岡斎藤小左衛門御告御用有之罷越候間、諸事差支無之様可被申通旨寺社奉行江申遣之、高岡祭司并同所在番御使番江も申遣之、

史料45 (『国日記』文政二年二月三日)

一、此度於西丸御男子様御誕生被為在、御名嘉千代様と被進、御簾中様御養御弘被仰出、諸事若君様御同様之儀二付、御告之儀僉儀申付候所、若君様御誕生之節計二而、当右大将様御事、御台様御養被仰出候節、御国許二而御告無之、猶又右以前も同様無之旨申出候得共、外御誕生様御養と違、則若君様二被為成候事二付、何れ御告有之候而可然御儀に付、猶又御用人江も評儀申付候所、是亦同様申出候間、則奉伺候所、若君様御誕生之節之通、右様之儀者御告可被成旨被仰出候、隨而去ル十八日於津梁院御告御用安西助市被仰付、相勤申候、於其表も長勝寺・高岡江御告之儀可被仰付候、

史料46 (『御用格(寛政本)』上卷四一三頁)

一、各高岡御告御用順之儀差懸り御用之差支不能成候様二、以後本順控之順番共二立置、無遲滞順書出候様両役可申合之旨御家老中より

被仰付候旨両組頭江書付にて相渡之、

宝曆三年九月十五日

史料47 (同前、一〇一四頁)

一、田中宗右衛門申立候、高岡祭司代当分被仰付候処、諏訪門兵衛より月並御神事計伝授相済、御告御用・臨時之御神事・御社参之節、御先立七月廿一日・十月十八日御神事相伝無之旨申出之、門兵衛伴宗右衛門より伝授候之様申付旨申遣之、

天明八年四月朔日

史料48 (同前、一〇〇二頁)

一、両組頭江申遣候ハ、各様高岡之御告御用之節是迄掃除小人「一人御貸被仰付候処、已来御借方無シ、掃除小人「一人拝借被仰付旨申遣之、

寛政四年二月七日

史料49 (同前、一〇七八頁)

天保十三年四月五日

一、高岡御告之儀御用之品二寄両組頭之内より被仰付来候得共、御省略御年限中不殘祭司役二而相勤候様被仰付候、尤重キ儀は其節御沙汰之上可被仰付旨高岡祭司役へ申遣之、

表1 高照神社「御告書付」一覧

No	年月日	勤仕者	内 容	内容 分類	備 考
1	享和元.10.3	一町田 左 門	数姫様御縁組(9/13)	①	(祭司役代)
2	文化4.5.24	岩崎 藤右衛門	松前派兵人数之義	②	祭司代 「日」
3	4.6.15	後藤 理右衛門	屋形様御着府之義(5/31)	③	祭司役
4	4.6.16	大道寺宇左衛門	異国船来着之儀ニ付国元江御暇(6/5)	②	御手廻組頭
5	5.10.1	後藤 理右衛門	屋形様御着府之義(9/13)	③	祭司役 「日」
6	6.1.3	渡 部 将 監	東西蝦夷地永々警固ニ付高直(文化3.12.17)	①・②	御家老 「日」
7	6.1.20	棟方 作右衛門	御高直御札之義(文化5.12/28)	①	御手廻組頭 「日」
8	7.3.23	津 軽 元太郎	御参府御時節伺	③	御馬廻組頭
9	7.6.4	西 館 宇 膳	共(友)姫様御縁組(5/19)	①	御手廻組頭
10	7.7.6	高倉 六郎次郎	就御大祭随神門御取建	④	御手廻組頭
11	7.7.18	後藤 理右衛門	屋形様痛所ニ付御大祭日延之義	④	祭司
12	7.8.15	〃	屋形様平常虎革御鞍覆御用得之義	①	祭司
13	8.3.1	〃	御鷹之鷹被献之義(1/16)	⑤	祭司
14	8.4.3	高倉 六郎次郎	若殿様御縁組(3/19)	①	御手廻組頭 「日」
15	11.12.7	添 田 常三郎	若殿様始而月並御出仕(11/15)	①	御馬廻組頭 「日」
16	12.1.21	後 藤 多 宮	御鷹之鷹被献之義(文化11.12)	⑤	祭司見習
17	12.1.23	後藤 理右衛門	若殿様年頭御祝儀御太刀献上(1/2)	⑤	祭司役 「日」
18	12.10.6	〔 〕 左衛門	御参勤之御札(9/14)	③	御馬廻組頭
19	13.3.23	杉 山 八五郎	御参府御時節伺	③	御馬廻組頭 「日」
20	13.4.21	後藤 理右衛門	若殿様御発駕之義	③	祭司 「日」
21	13.5.26	後 藤 多 宮	若殿様御着府之義(5/11)	③	祭司見習 「日」
22	13.6.9	後藤 理右衛門	若殿様御参府御札之義(5/15)	③	祭司 「日」
23	13.閏8.12	〃	屋形様御発駕之義	③	祭司 「日」
24	13.10.16	添田 儀左衛門	若殿様前髪執之義(9/27)	①	御馬廻 「日」
25	13.12.21	津 軽 文 蔵	御鷹之鷹拝領之義(12/2)	⑤	御馬廻組頭
26	14.1.28	後藤 理右衛門	御鷹之鷹被献之義	⑤	祭司
27	14.4.18	〃	満佐姫様御離縁之義	①	祭司 「日」
28	14.5.26	竹 内 源太夫	高岡本社御修復ニ付上遷宮之義	④	御馬廻組頭
29	14.6.23	沢 与左衛門	津軽甲斐守名代ニ而下向、蝦夷地御用(6/4)	②・③	御馬廻組頭
30	14.7.10	添田 儀左衛門	若殿様登城御中陰中御機嫌伺(6/23)	①	御馬廻組頭
31	14.11.6	高倉 六郎次郎	御即位ニ付御祝儀之義(9/21・10/4)	⑥	御手廻組頭 「日」
32	15.4.3	津 軽 俊 吉	御参府御時節之義	③	御馬廻組頭 「日」
33	文政元.5.21	後藤 理右衛門	年号文政与改元之義(5/4)	⑥	祭司 「日」
34	元.8.20	〃	屋形様御発駕之義	③	祭司 「日」
35	元.9.23	笹 森 勘解由	屋形様御着府之義(9/10)	③	祭司代 「日」
36	元.10.1	杉 山 八五郎	御参勤之御札之義(9/15)	③	御馬廻組頭 「日」
37	2.1.7	竹 内 源太夫	御鷹之鷹拝領之義(文政元.12/11)	⑤	御馬廻組頭 「日」
38	2.1.28	後 藤 多 宮	御鷹之鷹被献之義	⑤	祭司代
39	2.閏4.1	沢 与左衛門	若殿様名代ニ而下向、松前御固(4/18)	②・③	御馬廻組頭 「日」
40	2.閏4.13	後藤 理右衛門	若殿様御着城之義	③	祭司
41	2.12.4	堀 五郎左衛門	御鷹之鷹拝領之義(10/28)	⑤	御馬廻組頭 「日」
42	2.12.4	〃	於西之丸男子誕生之義(嘉千代)	⑦	御馬廻組頭 「日」
43	3.1.27	後 藤 多 宮	御鷹之鷹被献之義	⑤	祭司代

No	年月日	勤仕者	内 容	内容 分類	備 考
44	文政3.4.10	斎藤 小左衛門	嘉千代様御逝去之義	⑦	御馬廻組頭
45	3.6.15	杉 山 八五郎	御参府御時節伺之義	③	御馬廻組頭 「日」
46	3.6.15	〃	良姫様御縁組之義(5/23)	①	御馬廻組頭 「日」
47	3.6.15	〃	良姫様御結納御儀祝之義(5/26)	①	御馬廻組頭 「日」
48	3.7.12	堀 五郎左衛門	良姫様御婚調之御礼之義(6/21)	①	御馬廻組頭 「日」
49	3.8.24	後藤 理右衛門	若殿様御発駕之義	③	祭司
50	3.8.29	〃	若殿様不快二付帰城之義(8/28)	③	祭司
51	3.9.7	〃	若殿様全快二付御発駕之義	③	祭司
52	3.9.12	津 輕 延 尉	堀三十郎様奥様(良姫)逝去之義	①	御馬廻組頭 「日」
53	3.12.29		屋形様侍從被仰付之義	①	
54	7.6.15		屋形様神学皆伝之義	①	
55	7.閏8.12		御鷹之雲雀被献之義(8/15)	⑤	「日」
56	7.12.29		若殿様四品被仰付之義(12/16)	①	「日」
57	8.4.20		若殿様御能見物御料理頂戴(4/2)	⑤	「日」
58	8.4.23		屋形様御隠居、若殿様家督願(4/10)	①	「日」
59	10.1.27		欽姫様御拝領物之義(文政9.12.28)	⑤	
60	10.閏6.16		侍從様御差控御免之義(閏6.6)	①	「日」
61	10.7.9		柳原中屋敷差上、代地拝領(6/20)	⑧	
62	11.3.1		上屋敷御焼失之義(2/20)	⑧	
63	11.3.3		上屋敷焼失二付屋形様差控伺之義	⑧	「日」
64	11.6.8		本姫様御離縁之義	①	
65	天保4.1.17		上野御普請御用被仰付之義(天保3.12/27)	⑨	「日」
66	4.6.11		侍從様剃髮御改名願之義	①	「日」
67	10.3.26		屋形様領知朱印頂戴之義(3/5)	①	
68	10.8.7		侍從様柳島下屋敷江引移之義(7/6)	⑧	
69	嘉永元.4.7		年号嘉永与改元之義(3/15)	⑥	
70	3.6.7	一町田 左 門	屋形様御着府之義(5/18)	③	(祭司役代)
71	7.1.26	〃	若殿様太刀献上、盃・時服頂戴(1/2)	⑤	祭司役代
72	7.9.17	〃	屋形様御着府之義(9/3)	③	祭司役代
73	安政元.12.15	〃	御鷹之鷹拝領之義(11/19)	⑤	祭司役代
74	元.12.31	〃	年号安政与改元之義	⑥	祭司役代
75	元.12.31	津 輕 平八郎	若殿様四品被仰付之義(12/16)	①	御手廻組頭
76	安政2.1.17	一町田 左 門	若殿様四品御礼登城之義(安政元.12/31)	①	祭司役代
77	2.1.20	〃	柳島御屋敷焼失之義(安政元.12/10)	⑧	祭司役代
78	2.1.28	〃	御鷹之雁被献之義(安政元.11/19)	⑤	祭司役代
79	2.3.18	喜 多 村 監 物	屋形様領知判物頂戴之義(3/5)	①	御手廻組頭
80	2.3.28	一町田 左 門	若殿様名代二而下向、松前・領分固(3/15)	②・③	祭司役代
81	2.4.16	〃	若殿様御着城之義	③	祭司役代 「日」
82	2.4.28		箱館表并西蝦夷地警衛之義	②	
83	2.10.13		江戸表大地震二而諸屋敷倒損之義(10/2)	⑧	「日」
84	2.11.4		津輕本次郎名代二而下向、蝦夷地固	②・③	
85	3.9.8	一町田 左 門	江戸表大風雨二而諸屋敷破損之義(8/25)	⑧	祭司役代
86	4.3.24	〃	屋形様病氣快復、病後之御礼之義(2/25)	①	祭司役代
87	4.4.7	〃	屋形様参勤被仰出、縮緬等拝領(3/13)	③・③	祭司役代

No	年月日	勤仕者	内 容	内容 分類	備 考
88	安政4.7.12	渡 辺 次太夫	寛五郎様(承昭)御姫様(常)へ賀養子之義(6/28)	①	御馬廻組頭
89	4.8.8	一町田 左 門	若殿様江御姫様御結幣祝儀之義(7/9)	①	祭司役代
90	4.8.8	〃	屋形様以来殿様与可称之義	①	祭司役代
91	4.9.21	〃	殿様不快ニ付滞府願之義	③	祭司役代 「日」
92	4.11.17	〃	〃 (延引)	③	祭司役代
93	4.12.1	桜庭 兵右衛門	若殿様公方様江御目見之義	①	御馬廻組頭
94	4.12.24	足 立 矢 柄	若殿様登城始而月次御礼之義(12/1)	①	御手廻組頭 「日」
95	4.12.24	〃	若殿様より御姫様江結納之義(12/3)	①	御手廻組頭 「日」
96	5.1.6	桜庭 兵右衛門	若殿様御叙爵御官位土佐守之義(安政4.12/16)	①	御馬廻組頭
97	5.2.4	〃	若殿様年頭御礼太刀献上、盃等頂戴(1/2)	⑤	御馬廻組頭
98	5.3.11	一町田 左 門	御姫様以後若御前様与可称之義	①	祭司役代
99	5.5.21	〃	殿様病氣ニ付参勤御礼以使者献上物(4/28)	③・⑤	祭司役代 「日」
100	5.7.24	〃	紀伊宰相様(家茂)御養君被仰出	⑦	祭司役代
101	嘉永7.8.13		屋形様御発駕之義	③	
102	安政5.8.21	一町田 左 門	公方様薨去之義(8/8)	⑦	祭司役代
103	5.9.12	〃	御内證様(順承側)死去之義(8/23)	①	祭司役代
104	5.12.4	足 立 矢 柄	蝦夷地警固ニ付、参府并暇之月変更	②・③	御手廻組頭
105	5.12.9	〃	若殿様四品被仰付之義(11/23)	①	御手廻組頭 「日」
106	5.12.15		上様將軍宣下、以来公方様(家茂)	⑦	
107	5.12.27	一町田 左 門	將軍宣下之義(12/1)	⑦	祭司
108	5.12.27	〃	若殿様四品御礼登城之義(11/28)	①	祭司
109	6.2.23	渡 辺 治太夫	殿様大殿様与、若殿様殿様与可称之義	①	御手廻組頭 「日」
110	6.2.23	〃	殿様隠居、若殿様家督、蝦夷地警固同前(2/7)	①・②	御手廻組頭
111	6.4.24	西 館 宇 膳	御家督御礼登城之義(4/1)	①	御手廻組頭 「日」
112	6.4.28	牧 野 左次郎	殿様参勤被仰出、縮緬等拝領(4/13)	③・⑤	御馬廻組頭 「日」
113	6.5.13	竹 内 彦太郎	殿様御着城	③	御馬廻組頭 「日」
114	6.12.28		西蝦夷地内スツツ領よりセタナイ領境迄拝領(9/19)	②	
115	万延元.4.1		年号万延与改元之義(3/1)	⑥	
116	元.4.1		殿様領知判物頂戴之義(3/6)	①	
117	元.6.11		殿様実父細川越中守死去之義(5/27)	①	「日」
118	元.9.15	後藤 理右衛門	殿様御発駕之義	③	祭司見習 「日」
119	元.11.1	一町田 左 門	殿様御着府(9月)	③	(祭司)
120	元.11.4	〃	殿様御参勤御礼之義(10/15)	③	(祭司) 「日」
121	元カ.11.21		屋形様上野位牌所等普請御用済、時服拝領	⑤・⑨	
122	元.12.21	山 中 兵 部	大殿様和泉守、殿様越中守与改名	①	御馬廻組頭
123	元.12.21	〃	御鷹之鷹拝領之義	⑤	御馬廻組頭
124	2.1.3	西 館 宇 膳	蝦夷地・箱館警衛ニ付殿様侍従(万延元.12/16)	①・②	御手廻組頭 「日」
125	2.1.28	一町田 左 門	殿様侍従昇進御礼登城(万延元.12/21)	①	(祭司) 「日」
126	2.2.1	〃	御拝領御鷹之雁被献之義(万延元.11/28)	⑤	(祭司)
127	2.3.3	〃	参勤以来三月暇、九月中参府願之義(2/12)	③	(祭司) 「日」
128	2.3.21	〃	年号文久与改元之義(2/28)	⑥	(祭司) 「日」
129	文久元.4.1		殿様参勤被仰出、縮緬等拝領御礼(3/15)	③・⑤	「日」
130	元.4.20	一町田 左 門	横川御屋敷北御長屋西之方焼失(4/9)	⑧	(祭司) 「日」
131	元.7.24	〃	御前様(承昭室)逝去之義(7/13)	①	(祭司) 「日」

No	年月日	勤仕者	内 容	内容 分類	備 考
132	文久2.3.28	後藤 理右衛門	殿様参勤時節伺之義	③	(祭司見習) 「日」
133	2.8.13	牧 野 左次郎	殿様麻疹御順症之義(8/7より)	①	御馬廻組頭 「日」
134	2.8.20	足 立 矢 柄	殿様麻疹御順快之義(8/18)	①	御手廻組頭 「日」
135	2.11.3	佐藤源太左衛門	侍従様御逝去之義(10/18)	①	御馬廻組頭 「日」
136	3.1.26	津 軽 図 書	殿様夏中御在府願之義	③	「日」
137	3.7.11	杉 山 八兵衛	殿様京都警衛被仰出之義	⑩	御馬廻組頭
138	3.8.18	後藤 理右衛門	殿様御発駕之義	③	祭司見習 「日」
139	3.9.27	〃	浜町御屋敷類焼之義(9/5)	⑧	(祭司見習) 「日」
140	3.11.15	大道寺 儒之進	殿様上京御免・箱館・領内警備専務(10/8)	②・⑩	御馬廻組頭 「日」
141	4.3.27	後藤 理右衛門	年号元治与改元之義(3/1)	⑥	祭司見習 「日」
142	元治元.5.18	〃	殿様病後并御暇之御礼之義(4/25)	①・③	(祭司見習) 「日」
143	元.5.26	〃	殿様御着城之義	③	(祭司見習) 「日」
144	元.8.12	〃	京都騒擾ニ付御屋敷類焼之義(7/19)	⑧	(祭司見習) 「日」
145	元.8.18	〃	殿様御用ニ付急速御参府被仰出	⑪	(祭司見習) 「日」
146	元.8.18	〃	殿様浅草并本所御蔵御警衛之義	⑪	(祭司見習) 「日」
147	元.9.21	〃	殿様御参府前々之通	③	(祭司見習) 「日」
148	元.10.3	〃	殿様御発駕之義	③	(祭司見習) 「日」
149	元.11.11	〃	殿様御着府之義(10/23)	③	(祭司見習) 「日」
150	元.12.5	一町田 左 門	柳島御屋敷長屋焼失之義(10/10)	⑧	(祭司役)
151	元.12.18	後藤 理右衛門	殿様京都警衛被仰付之義	⑩	(祭司見習) 「日」
152	元.12.27	〃	殿様上京ニ付浅草・本所警衛御免之義	⑩・⑪	(祭司見習)
153	2.2.17	溝江 伝左衛門	殿様御着京之義(1/9)	⑩	御馬廻組頭
154	2.2.17	〃	殿様着京御礼参内、天盃頂戴(1/21)	⑩	御馬廻組頭
155	2.2.21	津 軽 平八郎	大殿様御逝去之義(2/8)	①	御手廻組頭
156	2.2.21	〃	大殿様不快ニ付、殿様帰府願之義(2/4)	①	(御手廻組頭)
157	2.5.12	一町田 左 門	年号慶応与改元(4/18)	⑥	祭司役
158	2.5.1	後藤源太右衛門	殿様参内、天盃頂戴(4/8)	⑩	御馬廻組頭
159	慶応元.5.21	一町田 左 門	殿様京都警衛済、御帰府之義(5/6)	⑩	(祭司役)
160	元.閏5.15	後藤 理右衛門	殿様、御進発留守中警衛之義(5/13)	⑪	(祭司見習)
161	元.閏5.15	〃	殿様少将御礼登城(5/14)	①	(祭司見習)
162	元.8.15	〃	殿様実名承昭与御改名之義(7/25)	①	祭司見習
163	2.9.14	斎 藤 幸 吉	公方様薨去、一橋中納言様相続(8/20)	⑦	祭司役代
164	元.9.28	後藤 理右衛門	殿様御留守御警衛之義(8/26)	⑪	祭司見習
165	3.1.27	斎 藤 幸 吉	主上崩御之義(慶応2.12.29)	⑥	(祭司役代) 「日」
166	3.3.6	後藤 理右衛門	殿様御着城之義	③	(祭司見習) 「日」
167	3.11.15	〃	上様、公方様与可称之義(9/21より)	⑦	祭司
168	4.2.1	〃	伏見辺大戦争ニ付出府被仰出(1/3)	⑫	(祭司)
169	4.4.5	〃	軍法改革之上惣兵銃隊被仰付之義	⑫	(祭司)
170-1	4.4.5	〃	大号令被発、各国カ相応人数上京之義	⑫	(祭司)
170-2	4.4.5	〃	徳川慶喜追討軍進発之義	⑫	(祭司)
171	4.7.7	〃	弁事御役所より呼出ニ付参朝之義(6/24)	⑫	
172	4.7.20	後藤 理右衛門	庄内御征討出兵之義	⑫	(祭司)
173	4.8.16	〃	南部家発砲ニ付征討被仰出(8/10)	⑫	(祭司)
174	4.10.2	〃	殿様九條殿江為御伺、久保田江御出	⑫	

No	年月日	勤仕者	内 容	内容 分類	備 考
175	慶応 4.10.7		醍醐殿、久保田江御転陣之義(10/5)	⑫	
176	4.10.20	後藤 理右衛門	殿様森岡駅より引返、御帰城	⑫	(祭司)
177	4.10.20	〃	奥羽賊徒降伏ニ付、国元江凱陣之義	⑫	(祭司)
178	4.11.22	〃	年号明治与改元之義(9月)	⑥	(祭司)
179	明治元.11.24	高倉 六郎次郎	御即位御祝儀之義(9/1)	⑤・⑪	(御手廻組頭)
180	元.12.4	後藤 理右衛門	殿様奥州触頭被仰付之義(11/5)	⑬	祭司
181	元.12.29	〃	朝廷之政体ニ基キ人民撫育之事	⑬	祭司
182	2.2.21	〃	東京本所二ツ目屋敷等下賜之義	⑧	祭司
183	2.2.27	〃	南部旧領民政取締御免之義(2/9)	⑬	祭司
184	2.4.6	〃	松前屯集賊徒追討軍派遣(4/5)	⑫	祭司
185	2.5.23	〃	箱館賊徒降伏ニ付殿様青森より帰城	⑫	祭司
186	2.5.29	〃	松前鎮定ニ付東京江参着可仕之義	⑩・⑪	祭司
187-1	2.6.14	〃	藩治職制改革之義	⑬	祭司
187-2	2.6.14	〃	松前地進撃ニ付総督府より御感状	⑫	祭司
188	2.6.15	〃	殿様御発駕之義	③	祭司役
189	2.6.15	森 岡 金 吾	御加増之義(6/2)	①	(御馬廻組頭)
190	2.7.27	後藤 理右衛門	敏武丸様御遠行之義(7/25)	①	祭司
191	2.8.4	〃	殿様参朝天機伺(7/7)	⑭	祭司
192	2.8.15	〃	殿様天盃頂戴、帰藩之暇被仰出(8/2)	③・⑬	祭司
193	2.8.15	〃	殿様参朝、御誓約之義(7/17)	⑭	祭司
194	2.8.24	〃	殿様、近衛様御姫様縁組(8/4)	①	祭司
195	2.9.3	〃	殿様御着城之義	③	祭司
196	2.10.1	沢 与左衛門	弁官より公用人御呼出之義(9/14)	⑬	(御手廻組頭)
197	2.10.20	後藤 理右衛門	信君様、京都より御着城	①	祭司
198	2.10.20	〃	後志国島牧郡之内須築支配被仰付義	⑬	祭司
199	2.11.2	佐藤源太左衛門	殿様御婚礼之義(11/1)	①	(御馬廻組頭)
200	2.11.4	後藤 理右衛門	信君様、御前様与可称之義	①	祭司
201	2.12.8	〃	貴様、以來貴姫様与可称之義	①	祭司
202	2.12.10	〃	貴姫様、御逝去之義(12/8)	①	祭司
203	3.5.27	〃	御城之義、以來藩庁与可称之義	⑬	祭司
204	3.5.27	〃	四位様、御前様三之丸御屋敷江移住(5/26)	①	祭司
205	3.7.16	〃	後志国嶋牧郡之内シャメクシナイ迄増支配	⑬	(祭司)
206	3.閏10.5	〃	後志国嶋牧郡之内シカルウスヨリ東方増支配	⑬	高岡掛
207	4.4.28	〃	四位様御発駕之義	③	高岡掛
208	4.6.7	斎 藤 富太郎	四位様御着府之義(3/15)	③	高懸代
209-1	4.7.27	〃	弘前藩知事免官之義(7月、209-2の別紙)	⑬	高懸代
209-2	4.7.27	〃	四位様参朝、別紙申渡(7/14)	⑬	高懸代
209-3	4.7.27	〃	廃藩置県之義(7/14、209-2の別紙)	⑬	高懸代
210	4.9.3	〃	御前様御発駕之義	③	高岡懸代
211	4.10.23	〃	御前様御着府之義(9/25)	③	高岡懸代
212	4.11.10	〃	春日神社合社之義	④	高岡懸代
213	4.11	〃	四位様横川御家邸江引移之義	⑧	(高岡掛代)
214	4.11	〃	御家邸、本町式丁目江引移之義(10/23)	⑧	高岡懸代
215	5.11.20	後 藤 奇 知	御女子様御誕生之義(10/6)	①	(祠官)

No	年月日	勤仕者	内 容	内容 分類	備 考
216	明治6.8.15	神 東太郎	近衛新正二位様御逝去(7/15)	①	
217	8.11.14	大道寺 繁 禎	御男子様御出生之義(11/3)	①	
218	9.12.29	孝 吾	昭徳様御逝去之義(12/18)	①	
219	10.6.28	〃	近衛英麿様御養子願之義(5/31)	①	
220	10.11	後 藤 奇 知	為信合祀之義	④	祠官
221	10.12.17	〃	従四位様、正四位ニ叙(12/3)	①	(祠官)
222	11.7.2	孝 吾	正四位様麝香之間詰被仰出(6/20)	①	
223	11.10.1	〃	英麿様横川御殿江被入(9/7)	⑧	
224	17.7.20	後 藤 孝 吾	正四位様伯爵トナル(7/7)	①	
225	18.4.19	津 軽 尚 志	正四位様三等勲章御拝授(4/2)	①	
226	18.7.8	伊 藤 茂三郎	正四位様御帰京之義	③	御廟所御用取扱人
227	19.10.23	津 軽 平八郎	正四位様被叙従三位之義(10/16)	①	
228	22.2.9	伊 藤 茂三郎	栖鷹様御分家男爵ニ被叙(1/29)	①	(御廟所御用取扱人)
229	25.3.11	〃	英麿様従五位ニ被叙(2/29)	①	(御廟所御用取扱人)
230	25.7.9	〃	従三位様、正三位ニ被叙(7/5)	①	(御廟所御用取扱人)
231	31.6.23	〃	正三位様、従二位ニ被叙(6/20)	①	(御廟所御用取扱人)
232	32.7.5	〃	英麿様、正五位ニ被叙(6/30)	①	(御廟所御用取扱人)
233	37.11.19		細川行雅様、栖鷹様ノ相續人ト被成(11/15)	①	
234	40.4.25		英麿様、御婚礼之義(4/12)	①	
235	大正5.7.24	黒 石 三 郎	従一位様薨去之義(7/19)	①	高照神社社掌
236	5.8.21		正四位様、御襲爵之義(8/10)	①	
237	8.4.5		伯爵英麿様薨去之義(4/5)	①	
238	(8月3日)		屋形様御着城之義	③	
239	(文化6.1.28)		屋形様侍従昇進御札登城(文化5.12/22)	①	
240	(2月9日)		欽姫様江公方様等より歳暮拝領(12/23)	⑤	
241	(5月26日)		屋形様帰国ニ付、公方様等より縮緬等拝領(3/13)	③・⑤	
242	(丑3月晦日)		若殿様前髪執之義	①	
243	(文久元.12.11)	一町田 左 門	大殿様、横川中屋敷江御移(11/6)	⑧	(祭司) 「日」
244	(7月5日)		松前表并領分海岸警備ニ付参府延引	②・③	
245	(10月12日)		屋形様御参府御札之義(9/15)	③	
246	(9月15日)		御鷹之雲雀被献之義(8/3)	⑤	
247	(9月20日)		御鷹之雲雀御拝領之義(8/2)	⑤	
248	(2月11日)		欽姫様江公方様等より歳暮拝領(12/27)	⑤	
249	(申4月朔日)		殿様参勤時節伺之義	③	
250	(12月26日)		満佐姫様、板倉阿波守江縁組(11/16)	①	
251	(11月23日)		若殿様大隅守与称(11/7)	①	
252	(寅3月23日)		屋形様御参府被仰出之義	③	
253	(3月晦日)		屋形様帰国ニ付右大將より縮緬等拝領(3/13)	③・⑤	

注1) Noは『高照神社所蔵品目録』の整理番号と一致する。

2) 年月日は「御告御用」実施日、内容中()の月日は御告内容の実際の月日。

3) 内容分類の番号は、本文中の細分類番号と一致する。

4) 備考の職名は勤仕者の役職。「日」は『国日記』にも記載のあるもの。

表 2 「御告書付」の内容と御用回数

大分類	細分類 番 号	項 目	御用回数(%)	
天 皇 家	⑥	天皇家即位、崩御、改元	11	15(5%)
	⑭	天皇家拝領品、献上品、天機伺	4	
将 軍 家	⑤	幕府拝領品、献上品	29	37(13%)
	⑦	將軍家の吉凶禍福	8	
巡 検 使			0	0(0%)
高照神社	④	高照神社関係	4	4(1%)
藩 主 家	①	藩主家の吉凶禍福	87	149(54%)
	③	参勤交代	62	
藩重要事	②	蝦夷地警備	14	73(26%)
	⑧	江戸・京都屋敷	16	
	⑨	普請	2	
	⑩	京都警衛	8	
	⑪	江戸警衛	5	
	⑫	戊辰戦争	15	
	⑬	明治政府よりの指示など	13	
注 1) 大分類は史料 2 による。			合計	278
2) 内容兼帯は複数カウント。				

表 3 「御告御用」の回数と年代（享和～大正）

年 号 (期間・年)	高照神社「御告書付」		『国日記』御告関係記事	
	回 数	回／年	回 数	回／年
享和(3)	1	0.3	1	0.3
文化(14)	32	2.3	74	5.3
文政(12)	32	2.7	112	9.3
天保(14)	4	0.3	108	7.7
弘化(4)	0	0	19	4.8
嘉永(6)	5	0.8	24	4
安政(6)	41	6.8	32	5.3
万延(1)	14	14	14	14
文久(3)	14	4.7	27	9
元治(1)	17	17	14	14
慶応(3)	21	7	3	1
年不詳(江戸)	14	—	—	—
小計 1 (67)	195	2.9	428	6.4
明治(44)	59	1.3	注) 御告先が複数の場合は 1 回としてカウント。	
大正(14)	3	0.2		
小計 2 (58)	62	1.1		
合計(125)	257	2.1		

表 4 高照神社「御告御用」勤仕者

職 名	回 数(%)
祭司・祭司代等	132(69%)
御手廻組頭	20(10%)
御馬廻組頭	38(20%)
家 老	1(1%)
合 計	191

注) 職名不明者は除く。

表5 『国日記』に見える勤仕者(享和2年～文政2年)

御告先 職名	長 勝 寺	高 照 神 社	報 恩 寺	革 秀 寺	津 梁 院	合 計
祭 司	0	23	0	0	0	23
御手廻組頭	18	4	0	0	2	24
御馬廻組頭	49	33	0	0	0	82
家 老	2	1	1	1	0	5
合 計	69	61	1	1	2	134

注)職名不明者は除く。

表6 『国日記』に見える御告先(正徳2年～文政2年)

年 号	御用 回数	御告先ごとの回数内訳					
		高	長・高	長・高・報	長・革	長	津
正徳2年	1	1					
宝暦5年	2	2					
寛政元年	3	3					
享和2年	1		1				
文化2年	1			1			
3年	1				1		
4年	9		6			3	
5年	5		5				
6年	10		7	1		1	1
7年	4		3				1
8年	5		4				1
9年	3		2			1	
10年	7		7				
11年	9		8				1
12年	9		8				1
13年	8		7			1	
14年	3		2			1	
文政元年	5		5				
2年	6		4				2
合計	92	6	69	2	1	7	7

注1) 高は高照神社、長は長勝寺、報は報恩寺、革は革秀寺、津は津梁院。

2) 文化15年は文政元年に含む。